

北条五代 外伝

～ ゆかりの地に伝わる逸話～

© 福岡市博物館蔵
「撮影者 要史康」

国宝「日光一文字」

日光権現社にあったものを北条早雲が申し請け、代々北条家の家宝とした。天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原攻めの際に黒田如水が、時の城主北条氏直より和睦の勞を取ったことへの謝礼として「北条白貝」、「東鏡」とともに譲り受けたといわれている。

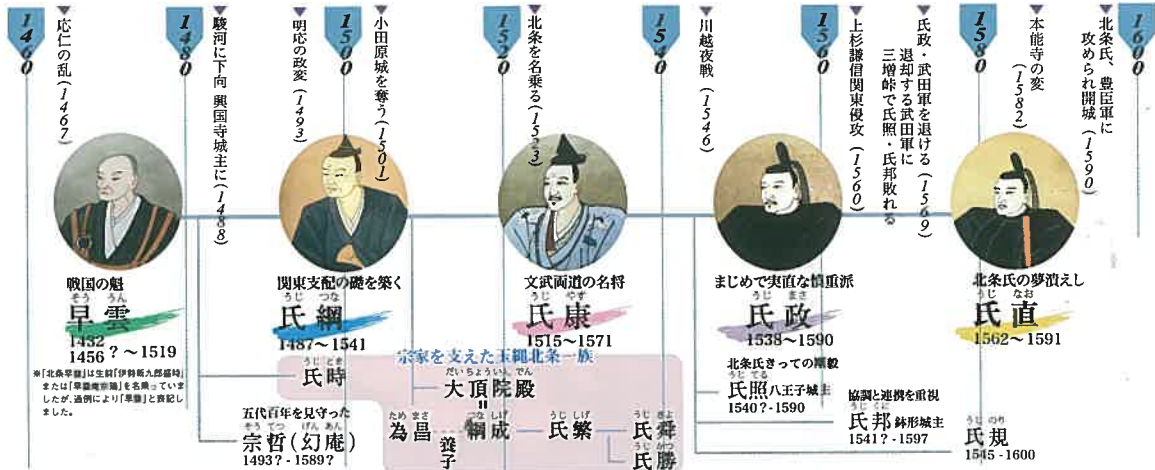


「北条五代」を
大河ドラマに!

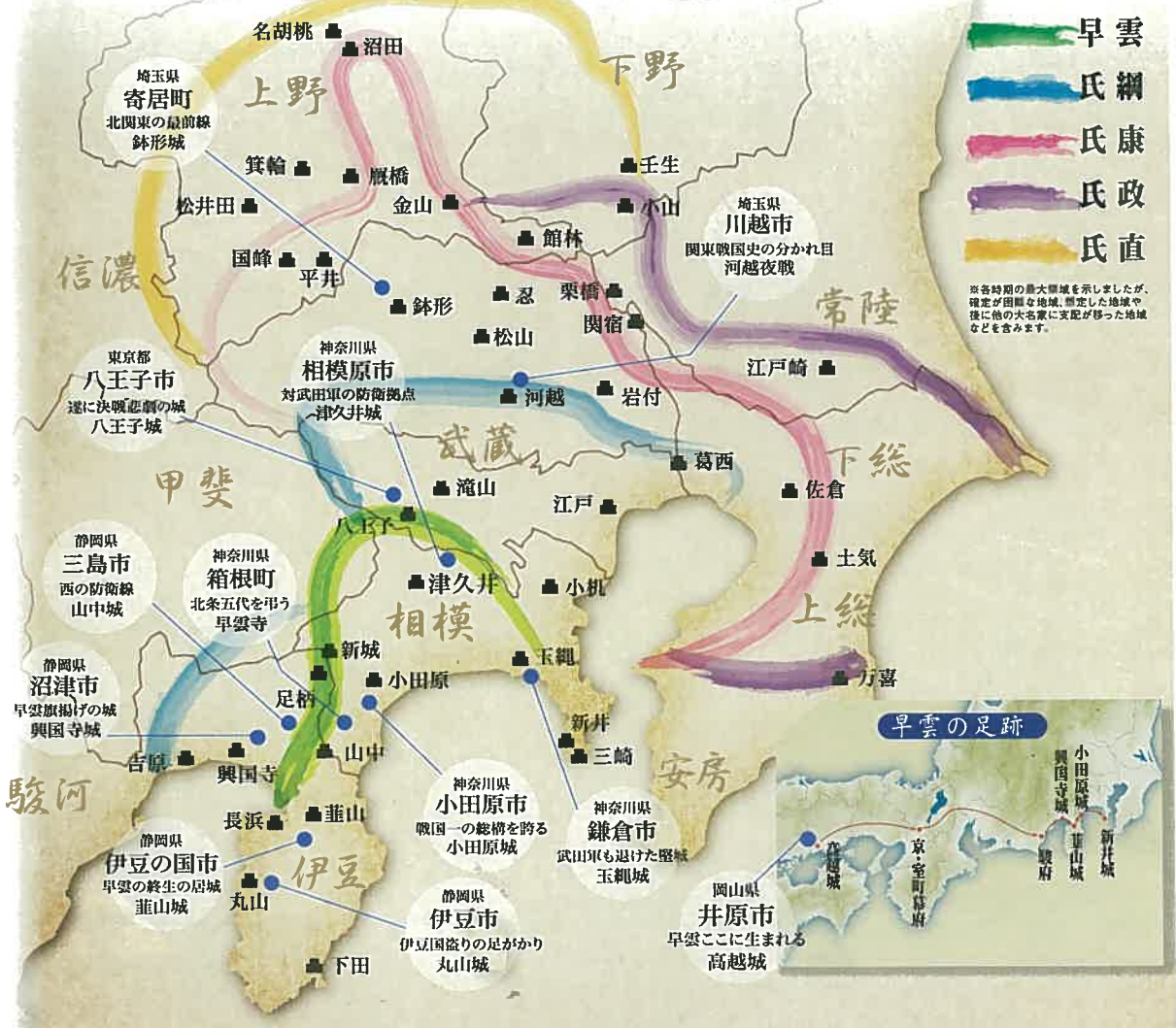
北条五代観光推進協議会

▲北条五代とは

北条早雲を祖とし、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代にわたる戦国大名をいう。備中荏原荘（現岡山県井原市）に生まれ育った早雲は、室町将軍 足利氏の申次衆の後、興国寺城主となる。その後、伊豆を平定、韮山城を居城とし、後に相模一国を従えた。二代氏綱の代より小田原城に在城した。早雲の時代に四公六民に年貢を下げ、善政を施き、民百姓を大事にし、それより五代氏直まで、諸国の武将が骨肉争う戦国時代にあつて、親子兄弟争うことなく、五代約百年の間、教育文化の高揚と、海運を活用し、商工業などの振興を図り関東八州を掌中に治めた。天正18年（1590）、豊臣秀吉の小田原攻めは、三ヶ月余に及ぶ戦国史上最大の攻城戦となるが、城下の住民を巻き込む戦いを避け、時の城主氏直は無血開城を決める。これにより、北条五代百年の幕を閉じることとなった。



北条氏支配領域図



北条早雲



初代早雲は備中荏原庄（岡山県井原市）を知行していた備中伊勢氏いせしんくろうもりときの出身です。伊勢新九郎盛時と名乗り幕府に出仕していました。

長享元年（1487）以降は駿河（静岡県）の大名今川氏に仕え、明応2年（1493）には、將軍足利義政の甥で堀越公方の茶々丸を攻め滅ぼし、伊豆（静岡県）へ進出します。伊豆一国を治める戦国大名となった早雲は、15世紀末期（通説では明応4年（1495））に相模小田原（神奈川県小田原市）へ進出し、その後相模一国を平定します。

早雲が寄進した「摺り袈裟」の版木

井原市 伝承 早雲



室町時代前期に五郎大夫なるものが急死した折、十王から触れれば三悪道で苦を受ける者も皆解脱するという袈裟をもらい受け、甦った。そこで五郎はこの袈裟を版木にし、伊豆の修禅寺へ寄進した。後に初代早雲が修禅寺より譲り受け、青年期までを過ごした荏原庄にある法泉寺ほうせんじに寄進した。法泉寺には高越城主、伊勢新左衛門盛定（早雲の父）等祖先の菩提が弔われている。

根拠 「井原市の文化財」井原市教育委員会 2009 井原市法泉寺に伝わる「十王袈裟記」

北条綱重の終焉の地

三島市 史実 早雲



祐泉寺（三島市大社町）にある。綱重は初代早雲の第3子である幻庵の子。

根拠 三島市誌 下巻

足利政知（初代堀越公方）の終焉の地

三島市 伝承 早雲



足利二代將軍義詮を葬って建てたといわれる宝鏡院（三島市川原ヶ谷）内の義詮塚の傍らにある。

根拠 静岡県史 通史編

早雲と三嶋大社

三島市 伝承 早雲

初代早雲は三嶋大社に参詣して武運長久を祈ったが、2本の杉の大木を1匹の小さなねずみがかじり倒す夢を見て、2本の杉を関東の両上杉（扇谷、山内）氏、ねずみを子年生まれの自分と見立て、三嶋大社が自分の将来を教えてくれたに違いないと喜び、神馬、太刀、鎧兜を奉納した。その後関東への進出を図り、相模を支配下に治めた。

根拠 「ふるさと三島」、「三島小誌四」、「三島の昔話」

北条五代の仁政

三島市 史実 早雲

初代早雲以後四代にわたり、大勢力を築き上げた根拠はいくつかあるが、年貢軽減や中間搾取の制限などの仁政を行なったことが上げられる。また、三嶋大社への崇敬が深く、社殿の建立や、刀、所領の寄進もしばしば行っている。

根拠 「ふるさと三島」、「三島小誌四」、「三島の昔話」

早雲の名と生誕の地

早雲は生前「伊勢新九郎盛時」または「早雲庵宗瑞」を名乗っていた。北条姓を名乗ったのは氏綱の時代と言われており（「トピックス三」参照）、「北条早雲」というのは通例である。本誌も通例に倣って、早雲と表記している。

早雲は、現在の岡山県井原市に築かれた高越城で伊勢盛定の次男として生まれ、青年になり京都に出仕するまでをこの地で過ごした。高越城から三キロメートルほど西方には、早雲の父である伊勢盛定によって開かれた法泉寺があり、早雲も父の造営事業を引き継ぎ、祖先の菩提を弔ったとされている。

トピックス

早雲の狩野城攻略の城

伊豆市

伝承

早雲



かしわくぼ
柏久保城は、初代早雲の伊豆平定の際に、最後まで抵抗した狩野氏の居城を攻めるために早雲が築いた城といわれている。また、一説によると、もともとここから南南西約5kmに位置する狩野城の出城であったが、早雲が攻め落としたという説もある。現在でも新九郎谷や地獄沢といった地名が残っており、当時の激戦を物語っている。

根拠 「豆州志稿」、「北条五代記」、「大見三人衆由緒書」

伊豆侵攻に抵抗した 狩野氏の本拠地

伊豆市

史実

敵将一家臣



狩野城は、平安時代末期からの山城で伊豆国の豪族である狩野氏の本拠地。初代早雲の伊豆侵攻の際には、狩野道一が最後まで抵抗したが、足利茶々丸の自害を受け、降伏したと考えられる。その後、狩野氏一族は「旧豪族は地縁から切り離す」という早雲の政策により、小田原をはじめとする関東へ移されたが、小田原評定衆の中にも加わっていることから、狩野氏が北条家家臣の中核でも活躍していたことがうかがえる。

根拠 「小田原衆所領役帳」

早雲が茶毘にふされた寺

伊豆市

伝承

早雲



修禅寺は、大同2年(807)に空海とその高弟杲隣大徳の建立といわれる。初代早雲は伊豆国に討ち入る機会を狙うため、湯治客を装い、修善寺を訪れ、伊豆の情勢をうかがっていたようである。また、この頃の修禅寺は戦禍により荒廃していたため、伊豆を平定した早雲は、遠州石雲院の隆溪繁紹禅師を招き中興させた。永正16年(1519)8月15日、葦山城で死去し、修禅寺で茶毘にふされた。

根拠 「北条記」、「北条五代記」、「日本洞上聯灯録」

大見三人衆の居城

伊豆市

伝承

家臣



大見城は、平安時代末期に大見平三政もしくは成家により築城されたといわれている。初代早雲が伊豆侵攻の際には、大見郷の地侍「佐藤藤左衛門尉行広、梅原六郎左衛門尉宣貞、佐藤七郎左衛門尉」の3人を寄親とした「大見三人衆」が大見城に籠城したことや、柏久保城での活躍で、早雲を助けたことから、後に賞されている。

根拠 「豆州志稿」、「北条五代記」、「大見三人衆由緒書」

伊豆水軍富永氏の城

伊豆市

史実

家臣



伊豆侵攻を始めた初代早雲にいち早く従ったのが、当時の丸山城と高谷城の城主であり、付近の水軍を統率していた富永三郎左衛門尉政直である。政直は、早雲が本拠地を葦山城に移した際には、興国寺城代を、その後も江戸城代を任せられるなどした。富永氏一族や子孫は北条家を支える重臣として活躍した。

根拠 「基氏伝帖」、「北条記」、「北条五代記」、「豆州志稿」、「田方郡誌」、「野史」、「甲陽軍鑑」

金龍院

伊豆市

伝承

血族



幻庵は初代早雲の四男で、早雲から箱根権現別当職を任せられ、相模や伊豆に領地を与えられていた。一説には当時としては大変長寿の97歳まで生き、早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条五代の家臣として北条家を支えたといわれている。伊豆市大平地区の金龍院は幻庵が開基し、その後天正17年(1589)に当地で没したと伝えられる。幻庵と妻の位牌も残っている。

根拠 「増訂豆州志稿」、「田方郡誌」、「箱根神社文書」、「小田原所領役帳」

早雲の堀越御所攻め

伊豆の国市

伝承

早雲



明応2年(1493)、興国寺城主の初代早雲が堀越御所を急襲し、堀越公方を名乗っていた足利茶々丸を攻め滅ぼした。願成就院に茶々丸の墓あり(茶々丸の死については異説あり)。

根拠「葦山町史」第10巻「奔る雲のごとく」

早雲の葦山城築城

伊豆の国市

伝承

早雲



堀越御所を攻め落とした初代早雲は、葦山城を築いて伊豆平定・相模進攻の本拠地とした。城内の熊野神社は、明応9年(1500)に早雲が勧請し、建立したものとされている。

根拠「葦山町史」第10巻「奔る雲のごとく」

江川氏による 葦山城地の提供

伊豆の国市

伝承

早雲

江川氏の「系譜」によれば、第二十三代江川英住は、伊豆に進攻した初代早雲に仕えるとともに、自身の屋敷続きの土地を提供。そこに葦山城が築かれた。

根拠「葦山町史」第6巻上

早雲の伊豆平定

伊豆の国市

史実

早雲

伊豆に進攻した初代早雲は、狩野氏など伊豆国内の敵対勢力を攻撃し、数年をかけて平定。関東における戦国大名の魁となった。

根拠「葦山町史」第10巻「奔る雲のごとく」

早雲による 「四公六民」策の実施

伊豆の国市

伝承

早雲

「北条五代記」によれば、初代早雲は支配下に置いた土地の年貢率を下げ、「四公六民」とした。他国の農民は、それを聞いて「自分たちの国も新九郎殿の国になればよいのに」と願ったという。

根拠「葦山町史」第10巻「奔る雲のごとく」

早雲が名付けた銘酒 「江川酒」

伊豆の国市

伝承

早雲

江川氏の「系譜」第二十四代江川英盛の弟正秀の項に、酒を造って初代早雲に献上したところ、早雲はその美味なることを賞して「江川酒」と名付け、江川氏に「酒部屋」を造らせた、とある。

根拠「葦山町史」第6巻上

早雲、葦山城にて死去

伊豆の国市

史実

早雲

永正16年(1519)8月15日、病を得た初代早雲は、葦山城にて死去した。88歳であった(享年には異説あり)。既に相模国を平定し、家督を氏綱に譲っていたが、早雲は終生葦山城を居城とした。

根拠「葦山町史」第10巻「奔る雲のごとく」

水汲みの道

相模原市

伝承

早雲



津久井城主の内藤氏は、ある時、長享3年(1489)に創建されたと伝えられる観音寺に初めて参拝した。この折に、和尚はタブの木の根本からこんこんと湧き出る「観音寺の清泉」を使ってささやかな野点の茶会を催し歓迎した。この献上茶のまろやかな味に、内藤氏は大変喜んだという。

次の日から津久井城内には「水番」が置かれ、内藤氏は毎日この水を愛用し、茶の湯をたしなんだ。このため家来たちは、毎日、水汲みに観音寺に向いた。この城兵たちが通った道は「水汲みの道」と呼ばれ、根小屋のお屋敷から山ざわを通過して北根小屋、中野神社の上を抜け、観音寺に通ずるおよそ3kmの「水汲みの道」となると伝えられている。

根拠 伝承

早雲寺殿廿一箇条

早雲がつくったといわれる二十一箇条からなる家訓であり、北条家はこの教えをよく守り、五代百年の治世を築いた。

- 一、可宿佛神事 二、朝早可起事 三、夕早可寝事 四、手水事 五、拜事
- 六、刀衣裳事 七、結髪事 八、出仕事 九、受上食時事 十、不可為雑談虚笑事
- 十一、諸事可任人事 十二、讀書事 十三、宿老秘候時禮儀事 十四、不可申虚言事
- 十五、可學歌道事 十六、乗馬事 十七、可撰朋友事 十八、可修理四壁垣牆事
- 十九、門事 二十、火用心事 二十一、文武弓馬道事



▲箱根町「早雲寺」

北条早雲と玉縄城

鎌倉市

史実

早雲



現在、清泉女学院となっているところが、「城山」と呼ばれた玉縄城址の中心地である。玉縄城は、初代早雲が永正9年(1512)に小田原城の支城として、相模・三浦をおさえるために築城した山城である。早雲はこの城を築くことで三浦道寸を攻め滅ぼし、この辺一帯を治めることができた。その後、玉縄城主は次の略系図のとおり引き継がれていったと言われている。

北条早雲一氏時一為昌一綱成一氏繁一氏舜一氏勝

根拠 鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

火牛の計

小田原市

伝承

早雲



相模の国の支配を考えていた初代早雲は、小田原城主の大森氏に進物を送るなどし、油断させ「箱根山で鹿狩りをした

いので、箱根山に入らせてほしい」と頼み、大森氏の領内に入り、千頭もの牛の角に松明をくくりつけ、大軍と見せかけ、小田原城を手に入れたと伝わる。(現在では、創作という説が有力。)

根拠 小田原市史通史編

北条家と外郎家

小田原市

史実

家臣

外郎家の祖先は元の役人で、足利義満の招きで朝廷に仕えた。渡来時に持ち込んだ丸薬は「透頂香」の名で京都で評判となった。豊富な知識と経験から外国使節の接待役も務め、もてなしの菓子として創作したのがお菓子の「ういろう」の始まり。

永正元年(1504)、外郎家は初代早雲の招きにより小田原へ移り住んだ。医療技術を求められただけでなく、外交官など様々な役割を担っていた。さらに、大陸の知識と情報力に長けたことから軍師として北条五代に仕え、小田原合戦の籠城戦にも参戦した。北関東などに薬を提供しながらその土地の情勢を聞き出し、戦の動向を計る諜報活動に関与していたことを知る人は少ない。戦国武将には透頂香は万能薬、武運長久の御守りとして重用され、北条家にも進上された。薬とお菓子の「ういろう」は、伝統を守る外郎家で代々作り続けられ、現在の二十五代当主まで受け継がれている。

根拠 小田原市史、外郎家伝承

北条早雲と大道寺重時

川越市

伝承

家臣

京都から駿河国に下向した初代早雲と大道寺重時ら七名が約束を交わし、この七名の中で最初に城主になった人に、残りの六名が家臣になるというものであった。早雲が最初に駿河国興国寺城主になったので、重時は約束どおり北条早雲の家臣になった。

根拠 伝承

北条氏綱



二代氏綱は初代早雲の小田原進出後伊豆韮山城に止まった早雲に代わり、小田原城に入ったと見られています。早雲没後本城を小田原城に移し、伊勢から北条への改姓、虎朱印状の創出など、北条氏の基盤を整備した人物です。

また、領国を武蔵(東京都・埼玉県)、駿河、下総(千葉県の一部)にまで拡大し、東国の盟主としての地位を確立しました。

伊勢から北条への改姓

トピックス

氏綱が改姓をした時期は、大永3年(1523)といわれている。この北条姓は鎌倉幕府の執権北条氏の名字であり、早雲が本拠地とした伊豆の韮山は鎌倉北条氏の出身地であることが改姓の起源ではないかといわれている。正式な改姓は、勝手に名乗り出すのではなく、朝廷、つまり天皇の勅許を得る必要があったとされており、氏綱も改姓願いを申し出て公認されたといわれている。氏綱は、北条姓への改姓から数年で左京大夫という官職に任じられ、上杉氏や武田氏といった高い家格と同等の家格を形成することができたのである。

氏綱、葦山にて 早雲を弔う

伊豆の国市 史実 氏綱

初代早雲の死後1か月の永正16年(1519)9月15日、氏綱は葦山において「無遮会」という大法会を実施し、父の早雲を弔った。

根拠 「葦山町史」第10巻

氏綱の五女 「山木御大方」(崎姫)

伊豆の国市 史実 血族

二代氏綱の五女崎姫は、遠江の堀越貞基に嫁いだのが死別。北条氏に戻り、葦山城に近い山木に住まいしたことから「山木御大方」と呼ばれた。

根拠 「葦山町史」第10巻

玉繩城主北条氏時と 円光寺

鎌倉市 史実 血族

円光寺は、城護山明王院といって、もとは初代玉繩城主の北条氏時が澄範という僧を招いて建てた寺である。玉繩城主が城中や城下の平和をお祈りする祈願所として続いたが、元和5年(1619)に玉繩城が廃城となってからは、現在の場所に移されたという。

また、玉繩城跡の南の方には、円光寺曲輪という名が残っている。

根拠 鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

浜の大鳥居跡

鎌倉市 史実 氏綱

鶴岡八幡宮の供僧であった快元が書いた「快元僧都記」には、天文4年(1535)に、三代氏康の父である二代氏綱の時に鳥居再建の願いが出され、建替えを定めた、とされる記載がある。その後、上総(今の千葉県)で切り出した大木を海路で運搬し、17年の年月をかけ、やっと完成したようで、その時には盛大な儀式が行われたそうである。

根拠 鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

紙本着色北条氏綱像(神奈川県指定重要文化財)

箱根町 伝承 氏綱



二代氏綱の器量は、三代氏康に与えた遺書によって、「義を守りての滅亡と、義を捨てての栄花とは、天地格別にて候」と説いている。「切り取り強盗、勝手たるべし」の乱世に驚くべき器量人であった。また、北条五代の他の像は、胡坐をかいているが、氏綱像のみ正座をした像となっている。これは、後から書き直したものと見られている。

根拠 「早雲寺の名宝」図録、町郷土資料館発行

文化人氏綱、 酒呑童子絵巻を制作

小田原市 史実 氏綱

酒伝童子絵巻(サントリー美術館所蔵)は、二代氏綱が制作を依頼し、狩野元信、三条西実隆ら著名な京都文化人の手により享禄4年(1531)に完成した3巻の絵巻である。氏綱の京文化への思いを示し、また五代氏直の妻・督姫(家康の次女)はこの絵巻を再婚先の池田家に持参していることから、北条家の家宝だったと伝わる逸品である。氏綱が制作を京都の文化人たちに依頼する折、外郎家を取り次ぎの任を担ったと、三条西実隆の日記「実隆公記」に記されている。制作から200年後の江戸時代、第二代市川團十郎により創作された「外郎売」の早口台詞にも、源頼光などこの絵巻の登場人物の名が出てくる。氏綱の思いは形を変えて小田原に残っている。

根拠 実隆公記、小田原市史、後法成寺閨日記

北条氏綱と鯉

小田原市 伝承 氏綱

天文6年(1537)夏、二代氏綱の乗り船

に鯉が飛び込み、氏綱がこれを「勝負にかつうを」として縁起が良いと喜び、この後の上杉朝定との合戦に勝って武蔵への進出を果たしたことから、出陣前に鯉を食することが吉例となった。

根拠 「北条五代記」、国立国会図書館「本の万華鏡」

虎朱印

小田原市 史実 氏綱



虎の朱印は個人の印ではなく、公の権力であることを示す、今の公印のような使われ方の極めて早い例として有名で、二代氏綱から五代氏直までずっと同じものが使われ続けた。

北条の当主は、合戦の時も馬の鞍に印を括り付けて出陣したといわれ、当主以外には押印することができなかった。

根拠 学研「新説北条五代」(下山治久氏ほか)

弁財天を勧請

小田原市 伝承 氏綱

二代氏綱が使者として派遣した家臣が、帰路に浅草寺へ立ち寄り、弁財天堂から銭が涌き出て大変な騒ぎになったという事を氏綱に言上した。蓮乗院の長老曰く、「浅草寺は推古天皇の御世に草創されたもので、本尊は聖観音、関東最初の伽藍である。今の世は、国家乱逆の最中で民は困窮している。そこで、大慈大悲の功德により、人々に富を与えたのだろう。弁財天は、観音様が姿を変えたもので、北条家守護のご本尊とすべき」と演説した。これにより、氏綱は、城の北側の堀の内へ、江の島の弁財天を勧請し、当城の鎮守と崇めたといわれている。

根拠 北条記

北条氏康



三代氏康は氏綱の死後家督を継承し、大規模な検地を行い、税制改正を実施し、更に家臣の軍役などの役割担を把握するなど、領国支配の体制を本格的に整えたことで知られています。天文15年(1546)には氏康の名を著名にした河越夜戦に勝利することで、山内・扇谷の両上杉氏を関東から排除し、その勢力範囲は上野(群馬県)に拡大しました。

西の防衛線 山中城築城と氏康

三島市 伝承 氏康

三代目の氏康は、両上杉(扇谷、山内)氏を破り、関東の覇権を握り、永禄年間(1558～1570)に山中城を築いたと言われている。

根拠 「ふるさと三島」、「三島小誌四」、「三島の昔話」

映画のモデルになった 北条家臣笠原政堯

三島市 伝承 家臣

笠原政堯については、内通者の烙印が押され、討たれたという説が通説になっているが、北条家滅亡後、僧となって三島市の蔵六寺を開山し、一生を過ごしたという寺伝もある。

三谷幸喜監督の映画「ステキな金縛り」^{きよす}「清州会議」に登場する更科六兵衛(扮西田敏行)のモデルといわれている。

根拠 亀霊山蔵大寺の由来

紙本着色北条氏康像 (県指定重要文化財)

箱根町 伝承 氏康



画像は、侍烏帽子に直垂をつけた上疊の坐像で、直垂には、白地に赤と緑青の鶴・亀が描かれており、下衣は洒落者が着る片身替りであることが襟元でわかることから、文武両道に秀でた風流人(お洒落)であった。

根拠 「早雲寺の名宝」図録、町郷土資料館発行

氏康、大砲の音に驚き 自害(未遂)

小田原市 伝承 氏康

砲術訓練を見ていた三代氏康は、大砲や鉄砲などの大きな音に驚き、気を失った。気を取り戻した氏康は「家来の前で恥をさらしてしまった」と思い、自害しようとしたが、それを見た家来に「初めて見るものに驚くのは当然のこと。恥ではなく、あらかじめ心構えをしておくことが大切である。」と忠告された。氏康は心構えを大切に、常に堂々としていたといわれる。

根拠 亀霊山蔵、六寺の由

河越夜戦と 謎の美少女の正体

川越市 伝承 家臣

天文14年(1545)秋頃、三代氏康の義弟で家臣の北条綱成が守る河越城は、扇谷上杉朝定、山内上杉憲政、古河公方足利晴氏の連合軍約8万に包囲された。籠城を続ける中、翌年4月上旬には、ようやく氏康が約8千の兵を率いて河越城近くまで到着した。しかし、多勢の連合軍の前に、城内と連絡を取ることもできなかった。

そこへ登場したのは、長い黒髪をはためかせ、艶やかな化粧をした美少女であった。美少女は、城を幾重にも取り囲む連合軍の真ん中を単騎で突き進み、連合軍があっ気にとられる中、城内へと入った。美少女の正体は河越城に籠城する綱成の実弟、福島弁千代であった。危険を顧みず自ら志願し、美しい容姿を駆使して城内に入り、綱成に氏康の命や作戦の合図を伝えたのであった。弁千代の果敢な行動に、城兵らは大いに勇気付けられ、城の外の氏康軍と心を合わせ、夜襲という奇策を成功させたといわれている。

根拠 関八州古戦録

北条氏康と北条綱成兄弟

川越市 伝承 氏康

福島弁千代は見事河越城への使者としての責務を全うした。それにはこんな裏話がある。河越城への命がけの使者を誰が務めるかというときに、弁千代が三代氏康に進み出て「主君の恩に報いるため、兄の

綱成のため。他の者に任せられません」と必死に訴えたのである。氏康は涙を流しながら、盃を与え、それを認めたという。氏康の人柄を表すエピソードである。

根拠 関八州古戦録

勝ってもいないのに「勝った勝った」

川越市 伝承 氏康

河越夜戦の勝利に大きく貢献した北条綱成には、野戦で必ず使う必勝法があった。綱成は大将であるのにも関わらず先頭になって「勝った勝った」と雄叫びを上げながら突撃した。まだ勝ってもいないのである。これには味方も奮い立ち、河越夜戦の際も敵方は総崩れ。常勝を誇る綱成の地黄八幡の旗を見ただけで、敵は戦慄して意気消沈したという。

根拠 名将言行録

甲首の夜盗虫

川越市 伝承 民間

昔、夜盗虫と呼ばれる虫が大群で飛んでくると、人々は三回大声で「弁千代」と呼んだ。すると逃げ去ったという。夜盗虫は河越夜戦で討たれた連合軍の怨霊。「弁千代」は勇ましい功績をたてた北条方の少年といわれている。

根拠 川越の伝説

河越夜戦（首塚）

川越市 伝承



宝永年間(1704~11)に崩したところ觸骸が300~400個程掘り出されたことから天文年間(1532~55)の古戦場に間違いはないという。

根拠 「川越索題」

あかまがわ

赤間川の名の由来

川越市 伝承

名の由来のひとつとして、河越夜戦の折に討たれたおびたしい数の連合軍兵士が流した血によって川が真っ赤に染まったからというものがある。

根拠 伝承

なんば だのりしげ

難波田憲重にまつわる話

川越市 伝承 敵将

扇谷上杉氏の重臣として天文10年(1541)の二代氏綱の病死を機として河越城攻略に乗り出すが、後を継いだ三代氏康に阻まれた。その後、山内上杉氏の当主で関東管領・上杉憲政の片諱を受けて「正直」から「憲重」に改名したとする説もある。

憲重の工作が奏して、天文14年(1545)に両上杉氏に古河公方・足利晴氏を加えた連合軍が後北条氏の河越城を包囲するが、天文15年(1546)の河越夜戦において古井戸に落ちて死去したと伝えられる。憲重の死とともに扇谷上杉氏は滅亡し、難波田氏は没落した。

根拠 小江戸川越まち歩き公式ガイドブックIN検索システム:Google

牛頭天王の霊験

川越市 伝承 氏康

川越市にある平野神社の祭神は、牛頭天王で三代氏康の建立という。天文年間の合戦中に陣中で病人や使者が続出。氏康が神の御加護を念じて祈った結果、再び

活気を取り戻し、大勝することができたという。なお、北条の陣はこの神社付近にあったという。

根拠 「志村家文書」

氏邦の愛したみかん

寄居町 伝承 血族



天文20年(1551)春、花園城主十五代藤田康邦の息女大福御前に、小田原城主三代北条氏康の四男乙千代を迎え、秩父天神山城に居住させた。その後、鉢形城に移り、北条氏邦と改名した。

この時氏邦は小田原より持参したみかんの苗を鉢形城内に定植し、異郷の慰めとしていたという。

天正18年(1590)鉢形城開城の際、寄居町風布地区に土着した家臣が、そのみかんを移植したといわれている。

それが現在の鑑賞用生花としても利用されているフクレミカンであり、そのみかんが観光みかん園として受け継がれている。

根拠 寄居郷土文化会発行「郷土の歩み」より

河越夜戦

天文10年(1541)~15年(1546)に渡り、河越城周辺で何度もなく合戦が繰り広げられたが、中でも有名なのが、天文15年(1546)4月20日の河越夜戦である。

武蔵国の枢要な城であった河越城を巡っては、争奪が繰り返され、天文10年(1541)、二代氏綱が死去し、三代氏康が家督を継ぐと、扇谷・山内両上杉氏は、千載一遇の機会とみて存還を図った。

天文14年(1545)9月に、両上杉の軍が河越城を包囲すると要請を受けた古河公方・足利晴氏もこれに加わった。城には北条綱成軍3千が籠城、対する包囲軍は8万といわれている。籠城戦は長陣となり、天文15年(1546)4月に三代氏康が8千の軍勢で河越に到着したが、とても敵わないとし、城と領地を放棄するかわりに城兵の救出を嘆願した。しかし、願いは聞き入れられず、意を決した氏康は4月20日に決戦を下知。

合戦は油断している相手の隙をついて北条軍が夜襲をかけ、約一時間で決着。憲政軍は3千の死者を出し、河越城包囲の首謀者らは一族ごと討死した。絶対的に不利な状況を覆したこの北条軍の勝利により、北条氏の関東支配が大きく前進した。

北条氏政

はが 垺和伊予守興国寺城で 奮戦

沼津市

伝承

氏政



武田信玄の「深沢城矢文」で有名な武田軍の深沢城功固戦の際に、武田軍の一部が南下して、興国寺城を攻めた。このとき北条氏の家臣垺和伊予守氏統が興国寺城将として奮戦し、敵（武田氏）五十余人を討ち取り、四代氏政から感状をもらったとされる。

根拠 北条氏政感状写（垺和氏古文書）

ふしん 長浜城の普請と 駿河湾海戦

沼津市

史実

家臣



北条氏は、武田勝頼が普請した三枚橋城さんまいばしに対抗して、長浜城を普請し、水軍の大將である梶原備前守かじわらびぜんのかみをおいた。海上では、両水軍による海戦が行われるようになった。そうした中の天正8年（1580）3月15日武田の軍船5隻が長浜城に攻め寄せたことにより、大きな海戦が始まった。

根拠 北条五代記・武徳編年集成などの江戸時代の戦記物の他小浜家文書の勝頼感状

いまがわうじざね 今川氏真、 沼津の大平に入る

沼津市

伝承



永禄11年（1568）12月、武田軍の駿河への侵入により、今川氏真は駿府から逃れて掛川城に籠もったが、徳川家康にも攻められて、掛川城を開城し、夫人の実家である北条氏の庇護を受けて、沼津市の大平に入ったとされる。

根拠 今川氏真禁制（桃源院文書）
今川氏真判物写（安得虎子十）

そうかんじ 宋閑寺（三島市山中新田） の墓所

三島市

伝承

家臣



開基は北条氏家臣であった間宮康俊の娘、お久の方と伝えられ、山中城三の丸跡に多くの武将を敵、味方なく祀り、供養するため建立。山中城攻城戦で戦死した、北条軍（山中城主の松田康長、副将の間宮康俊兄弟、上野箕輪城主の多米長定）、豊臣軍（一柳直末）の墓石が並んで建立。

根拠 三島市誌 下巻

三増峠の戦い

永禄12年（1569）10月、武田信玄が小田原城下まで侵攻した際、その帰路に、津久井境の三増峠（神奈川県愛川町）で待ち伏せする北条軍との間で合戦となった。

小田原城を攻囲した武田軍は、長陣は不利とし城下を焼き払い、兵を引き上げた。それを受け、北条方の北条氏照、氏邦、綱成ら武蔵諸城の将兵が、三増峠に先回りして待ち伏せを図った。戦況には諸説あるが、当初は北条方が優勢に見えたが、武田軍の山県昌景らに背後を突かれ一気に総崩れとなり、そのまま敗退した。

四代氏政は三代氏康存命中の永禄3年（1560）に家督を継承しています。永禄4年（1561）の上杉謙信、永禄12年（1569）の武田信玄による小田原攻めを退けています。氏直に家督を譲った後も、北条氏の最高実力者として君臨しますが、天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めの敗北により切腹しています。



■ 葦山城の戦い (対武田1) (氏規)

伊豆の国市 史実 血族

永禄12年(1569)6月、甲斐の武田信玄が大軍を率いて伊豆に攻め込んできた。その時、武田軍は葦山城近くまで迫り、葦山城将氏規の軍勢と戦っている。

根拠 「葦山町史」第10巻

■ 葦山城の戦い (対武田2) (氏規)

伊豆の国市 史実 血族

元亀元年(1570)8月、武田勝頼・山県昌景・小山田信茂ら武田軍が伊豆に進攻、氏規を城将とする葦山城を攻めたが落とせず、城下を焼き払って退去した。

根拠 「葦山町史」第10巻

■ 葦山城の戦い (対豊臣) (氏規)

伊豆の国市 史実 血族

天正18年(1590)、豊臣軍による小田原攻めの際、織田信雄を総大将とする

4万4千の大軍に囲まれた葦山城は、約3か月の籠城戦の後、6月24日に開城、城主氏規は小田原城へ移った。

根拠 「葦山町史」第10巻

■ 敵味方に分かれた 江川父子

伊豆の国市 史実 家臣

江川氏「系譜」に、葦山城攻防戦の際、江川氏第二十七代英吉は葦山城の江川曲輪を守備。その息子英長は、徳川家康の旗本として攻め手側において、葦山城の開城交渉に功があったという。

根拠 「葦山町史」第6巻

■ 葦山竹による利休作の 花入「園城寺」他

伊豆の国市 史実

豊臣秀吉の小田原攻めに同道した千利休は、葦山城付近で採られた雪割れのある竹(葦山竹)を用いて、「園城寺」「よなか」「尺八」という竹花入を作った。(園城寺は国指定重文)。

根拠 「葦山町史」第10巻

■ 処刑された恨みが 供え餅に出る

相模原市 伝承 家臣



三増合戦の折、津久井城兵は、武田軍の雑兵十数名を捕虜にした。小田原のお屋形様から、早く打首にするよう命令が下り、正月の近い12月28日にそのことを伝えられた敵兵達は、「正月を前にせめて餅のひとつも食わせてもらえぬか」と頼んだが、津久井城の人切り五人衆は、「何を言うか、貴様たちによって三千二百人の仲間が死んだ」と取りあわず処刑した。それから、12月28日に餅をつくると、必ず、五人の家に限って赤い血が混じったといわれている。このことが村の家々に伝わり、それから、根小屋ではこの日に餅をついたり、お祝いごとを一切してはいけないと伝えられている。

根拠 伝承

■ 敵の退路を急襲するも、 奮戦むなしく

相模原市 伝承 味方



三増峠の戦い後の、武田勢の一隊の退路途中に、日向薬師の山伏の100人程度の手勢が、北条氏の日頃の寄進の恩に報いるために、青根で待ち伏せし急襲した。しかし奮戦むなしく、勝快法印をはじめ多くが討死にした。現在、「法印の首塚」があり、青根の諏訪神社には山伏たちを祭った八幡宮がある。昭和44年に勝快法印の御子孫の建立した供養碑が静寂な空間にひっそりと建っている。

根拠 昭和62年発行「津久井町郷土誌」位牌現存 相州津久井青根於打死同所と有り

■ 葦山城

明応2年(1493)、早雲が伊豆国を領有し、葦山城を築城。早雲はここを居城としていたが、二代氏綱が本拠地を小田原に移してからは、葦山城は伊豆の支城として機能していた。軍事的には、西側防備の中心的存在であり、永禄11年(1568)、甲斐の武田信玄との合戦時も、武田軍の侵攻を防ぐ前線基地となり、城代として四代氏政の弟・三崎城主の氏規が送り込まれた。その後も、武田勝頼との攻防戦、更に豊臣秀吉の小田原攻めの危機が迫り、葦山城の防衛基地としての役割は、ますます重要性を帯びていった。

小田原合戦では、豊臣の大軍に包囲されながらも孤軍奮闘し、小田原城、武蔵忍城とともに、最後まで落城することはなかった。



▲現在の葦山城址からの眺め

■ 虎朱印・祿壽應穩

二代氏綱以後、北条家当主の文書に使用された虎の印判は、「祿壽應穩」の文字の上に虎が刻まれており、「祿(財産)と寿(生命)は応(まさ)に穩やかなるべし(人々が皆平和に暮らせるように)」という願いが込められているといわれる。家臣や代官による非法が生じていたが、この印判の使用後は、たとえ家臣や代官の命令であっても虎朱印が押されていなければ従う必要がなく、北条氏が農民を直接支配することになる画期的な意味があった。



提灯の代わりにされた 寺院

相模原市

史実

氏政



武田軍は三増合戦の折、帰路途中にある寺院に、提灯 200 の献上を要請したが、「ここは北条様の知行地、寺と言えども敵方を手助けできない」と答えたところ、怒った武田勢に「それでは寺ごと提灯にしてくれる」と火をつけられ全焼の憂き目にあった。その火は、周辺の山野にも燃え広がり、武田軍の行く手を照らしたという。なお、この戦いで武田軍が利用したとされる道を「信玄道」、又は、皮肉を込めて「信玄逃げ道」と呼ばれる。

根拠 明治 12 年寺院由緒 内務省宛進達文書

富士塚の伝承

相模原市

伝承

氏政



津久井城の城下町の根小屋の金原は、幾度となく武田軍との攻防の場となった。山岳戦で有名な「三増合戦」の時、信玄が武田勢の士気を高めることをねらってここに富士山を作った。武田勢は富士山が見えるところでは、絶対に負けなという信仰があった。

津久井城落城時は、城兵の首を埋めた伝承が残っている。地元では富士塚と言ひ「富士浅間大神」の碑を建立し、往時をしのぶとともに戦死者を弔っている。

根拠 伝承

芹椀

箱根町

伝承

氏政



椀に金の平蒔絵で芹が描かれている五椀形式のもの。寺伝によれば、四代氏政が百組を早雲寺に寄進し、小田原落城により五代氏直が高野山に配流の身となった際、半分の五十組を高野山高室院に持参したと言われている。早雲寺に残った芹椀で五椀そろっているのは一組だけである。

根拠 「早雲寺の名宝」図録、町郷土資料館発行

氏政・氏照の最期

小田原市

伝承

氏政

小田原城の無血開城の和談により、数万の籠城衆を退かせ、四代氏政、氏照は7月9日に城を出て、医者^{たむらあんせい}の田村安栖の宿所に移ったが11日には、切腹せよと検使が訪れ、兄弟は自害することとなった。介錯は弟の氏規が行い、介錯後すぐに氏規も自害しようとしたが、家康より派遣されていた井伊直政に取り押さえられ、思い留まった。その際の混乱に紛れて、氏照の首を小姓の山角牛太郎^{やまかくうしたろう}が奪い取って逃げたが、なだめすかして取り返した。若輩ものだが、主人を思う志はあつぱれということで、家康に目通しが叶った。

根拠 北条記

戦上手な北条氏照

八王子市

史実

血族

北条氏照は、北条氏の中でも戦上手とされた。氏照の兄である四代氏政が下総結城城を攻める際に、部下に出した指令書の中で「陣を敷くときは氏照の陣取りを手本にするように」と記している。

根拠 「天正五年七月十三日付北条家朱印状」(国立公文書館所蔵豊島宮城文書)

敵方から恐れられた氏照

八王子市

史実

血族

石田三成が、宇都宮氏に上洛をうながすために手紙を送った中で、「上洛を延ばしているうちに、北条氏照が先に上洛していろいろと話をされると、(あなたの)ためにならないだろう」と記している。

根拠 天正十七年推定の三月十一日付石田三成書状(宇都宮家文書)

北条氏照と武田勝頼の 鍵合わせ

八王子市

伝承

血族



永禄 12 年 (1569)、武田信玄は北条領に進軍し、小田原へ向かう途中、氏照の居城滝山城(八王子市)を攻撃した。その際、氏照は二の丸で自ら鍵をとり防戦、武田勝頼と鍵を合わせたという。

根拠 「新編武蔵国風土記稿」滝山城跡の項(引用元は「甲陽軍鑑」)

八王子城は安土城が モデルか

八王子市

伝承

血族



天正 8 年 (1580)、氏照は織田信長に使者を派遣している。使者の間宮は安土城を目にしているが、その後の八王子城築

城に関わっているとみられており、安土城をモデルとしたのかもしれない。

根拠 「使者の派遣については「信長公記」に記載あり

サイカチの樹

八王子市

伝承

血族

北条氏照が八王子城を築城したとき、甲州方面からの攻撃に備えて、逆茂木に利用するためサイカチの樹を植えさせたといい、その樹が江戸時代の頃まで村に残っていたという。

根拠 「武蔵名勝図絵」上栲田村の項

月夜峰

八王子市

伝承

血族

八王子市横川町に月夜峰という地名がある。北条氏照がこの地にて月を眺めたことに由来したとされる。

根拠 「武蔵名勝図絵」元八王子村の項

笛継観音の伝説

八王子市

伝承

家臣

北条氏照の家臣である浅尾某は横笛の名手で、氏照から秘蔵の横笛を預かったが、誤って壊してしまった。そこで当地の観音様（現八王子市小宮町東福寺境内）に祈念したところ、全く元通りに直っていた。そのことを知った氏照から、浅尾某は「笛彦兵衛」との名前をもらった。その後八王子城の戦いの折、笛彦兵衛は討ち死にし、秘蔵の横笛も焼失した。

根拠 「武蔵名勝図絵」小宮領の項

狭間の獅子舞

八王子市

伝承

血族



市指定文化財である「狭間の獅子舞」は、北条氏照から拝領されたものと伝わって

いる。

根拠 個人蔵の文書

稚児岩

寄居町

伝承

血族

四代氏政に仕えた一人の青年武士は、氏政夫人の腰元として仕えた容姿端麗な美しい乙女と心通わせるようになった。氏政夫妻は二人のロマンスが城内の騒ぎになると、熟慮の末、弟氏邦の鉢形城へ預けることになった。

青年武士は氏邦の側近に、乙女は夫人の大福御前の女中としてそれぞれ起居を共にすることとなり、しだいに二人はこっそり城内を抜け出し、会うようになった。正式の夫婦でない二人であったが、乙女は妊娠してしまう。

ひそかに二人は城を抜け出し、深沢川の上流へと足を進んだ。

やがて寒さと疲れで動けなくなり、^{くまやま}車山が見える平らな岩の上に腰を下ろしてし

ばし休んだ。そのうち、乙女は産気づき、玉のような男の子が産声を上げて生まれたという。

それに気付いた農婦は自分の家に2人を案内し世話をした。

郷人はこの岩を稚児岩と名付け現在まで伝わっている。

根拠 伝承

鉢形衆「黒備えの軍団」

寄居町

伝承

血族

秩父衆、荒川衆などの大小の武士団をもって統合された氏邦配下の家臣団は「鉢形衆」と呼ばれ、氏邦の定めた軍法によって厳しく統制されていた。甲冑、羽織などの装備と装束はその色を「黒」で統一することとされた。「黒備えの軍団」として黒い旗印を背負った軍団が、氏邦と共に数々の戦場を走り回ったという。

根拠 北条氏邦印判状（逸見家文章ほか）

小田原合戦

天正18年（1590）4月、関東最大の戦力を誇る北条氏の本拠地小田原城は、全国統一を目論む豊臣秀吉率いる諸大名の大軍に包囲される。豊臣方の軍勢約22万人に対し、北条方は約6万人だったといわれている。時の城主氏直は、この決戦に備え、城下町ごとを囲む全長9kmにも及ぶ大外郭を構築したほか、主力を小田原城に集結させ、領内100カ所に及ぶ支城の防備を固めるなど防衛体制を整えていた。対する豊臣方は、十分な兵糧・資金を用意し長期戦の構えで臨み、壮大な石垣山城を築き、本営を湯本早雲寺から移動させた。約3カ月にも及ぶ長期戦となったが、各地の支城を落とされ、小田原城が孤立した状態になり、城主氏直は、自らの命と引き換えに、籠城した一族や家臣たちの助命を願い出た。しかし、秀吉はこれを認めず、氏直の父氏政とその弟氏照らに切腹、氏直を高野山追放を命じ、ここに北条氏は滅亡、同時に秀吉の天下統一が達成され、戦国時代は終結した。



北条氏直



五代氏直は四代氏政存命中の天正8年(1580)に家督を継承しています。天正10年(1582)には武田氏が滅亡し、次いで織田信長が亡くなると、上野、下野(栃木県)方面へ積極的に軍勢を派遣し、北条氏の支配領域は最大に達しました。しかし、小田原合戦の敗北の後、高野山へ追放され、その翌年に亡くなっています。こうして、約100年にわたる戦国大名北条氏による関東支配は終わりを告げます。

■ 山中城落城悲話

三島市 伝承 氏直

五代氏直のとき、天正18年(1590)に箱根山西麓の番城(城主を置かない城)の山中城には松田康長を守将に約4千人の決死の守備。約7万人の豊臣軍(徳川軍含む)に攻められ半日で落城。

根拠 箱根神社文書、「ふるさと三島」

■ 仕事中に酒盛り

相模原市 伝承 氏直



本能寺の変直後に、北条氏は北関東で敵国と戦闘状態に有り、領国全体に動揺が広がっていた。そんな時、津久井城では酒ばかり飲んで、ちゃんと仕事をしていない奴らがいるとの情報を聞きつけた北条氏は、重臣に、いくつかの注意事項を書き与えて、注意させるために派遣するが、その一つに、「番衆が寄り合って酒を飲むことは、堅くこれを禁止する。いつも守られていないとのことである」とある。その後に守られたどうかは文献が発見されていないので不明である。

根拠 津久井城掟

■ 八王子城から 津久井城へ伝令

相模原市 伝承 血族

八王子城が豊臣秀吉の軍に攻められ落城した時、津久井城へ落城の伝令に走った騎馬武者がいた。無事津久井の地に到着した武者は、土地の人に戦況を尋ねて、津久井城も落城したことを知り、落胆して馬から降りた。その時、ムチの代わりに持っていた梅の枝を道端に突き刺したところ、これが根付き花を咲かせたと伝えられる。土地の人々は「下馬梅」と呼び大事にしてきた。また逆さに咲くので「逆さ梅」とも呼ばれてきたが、大正の頃枯れてしまったという。現在の梅は、地域の方達により1980年に植えられた。

根拠 津久井城掟

■ 落城を伝える棒打ち唄

相模原市 伝承



「津久井の城が落ちたげな弓と矢小旗の竿がながれくる」

相模原市の番田地区には、炎天下にほこりにまみれ、汗だくで続く過酷な脱穀作業を和らげる目的で作られたぼうち唄が今に伝承されている。

津久井城を望むこの地域、折しも脱穀の時期を迎える6月25日、地域の象徴として眼前にそびえた津久井城の落城を垣間見た村人たちの哀愁の思いが伝わってくる。

根拠 伝承

■ 刀を研いだと伝えられる池

相模原市 伝承

津久井城の山頂部には、宝ヶ池と呼ばれる溜井がある。この池は、どの古絵図にも井戸として記されていて、「新編相模風土記稿」は水が白く濁っていることから、城兵が刀を研いだという伝説がある、と伝えている。城兵の命を守った池は現在でも枯れることなく水を湛えている。

根拠 新編相模風土記稿

■ 裏切り者は許さず

相模原市 伝承 味方



津久井城の守備兵のひとりの一郎兵衛は、津久井城を取り囲むかがり火を見ながら、同志たちと最後の戦いに備えていた。脳裏には川向こうの村の将来を約束した美しい娘の姿。非常呼集のあった数か月前、別れも告げられず登城したが、明日までの命と思えば思うほど会いたい気持ちを抑えられずに、見張りの少ない飯縄曲輪と本城曲輪の中間の北側の断崖絶壁を相模川を目指して一気にころがる

ようにすべり降りて行った。しかし、荒川の別名があるほどの難所で、数日前の雨で水かさも増して船がなければ到底わたることなどできなかった。気を取り戻し、戻ろうと岸壁を登り始めたが、脱走兵に対する津久井城の報復なのかドドーンという地響きとともに山崩れが起き、一郎兵衛は美しい娘の名を叫びつつ濁流の中に消えていった。

根拠 伝承

玉縄城主、 北条氏勝の活躍

鎌倉市 伝承 氏直

天正17年(1589)、六代玉縄城主北条氏勝は、豊臣秀吉が小田原征伐に出兵するという知らせがあったので、小田原の北条本家の要請により、箱根の山中城の援軍として出かけた。しかし、山中城は豊臣氏との戦いに敗れ、氏勝は玉縄城に戻って籠城したが、天正18年(1590)に氏勝は、ついに家康の軍に降った。ここに、堅固を誇った玉縄城も家康の前に開城した。

根拠 鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

氏直の軍法

小田原市 史実 氏直



五代氏直は、豊臣秀吉の軍勢に対し、籠城することとした。豊臣軍は昼夜とわず攻め続けるが、城郭が堅固で攻め落とすことはできなかった。小田原城は、東西五十町、南北七十町、めぐり五里(実際には約9km)に及ぶ大城であり、総構として堀を掘り、堤の上には偵察の櫓を構えていた。また、所々には特に高い物見台を設け、夜は要所に設けられた番所から弓、鉄砲を隙なく放つことにより敵を近づけなかった。更に、総構を巡りながらの警固も行っていた。氏直の軍法は、各々の守備の持ち場が夜中に攻められたとしても、他の持ち場から加勢してはな

らない。いずれの持ち場も人数を多く配置しているので、慌てて散乱してはいけない。昼間は警固の者以外は、籠城で退屈しないようにおもいおもいに心身を休めるよう心掛けよというものであった。よって、昼は、碁や将棋、双六で遊ぶ陣所や酒宴をしたり、乱舞に興ずる陣所もあった。民に対しては、当年分の米のみを支度すれば、余った米は市で売ってもよい。来春には、全ての民に俸禄を与えるという旨の高札を立て、万民に至るまで乏しくなることはなかったといわれている。また、小田原城の総構が堅固だったため、小田原合戦に参陣した諸将が、自らの城下にも取り入れたといわれており、豊臣秀吉が天正19年(1591)に築かせた京都の御土居も小田原城の総構を参考にしたといわれている。

根拠 北条五代記「小田原市史 別編 城郭」

風魔小太郎

小田原市 伝承 氏直

関東諸国が戦乱の地と成り果てていたところ、「乱波」と呼ばれる者がいた。盗人ではあるが、才智を有しており、その謀計策は武士にも通じるところがあった。五代氏直は、200人ほどの乱波を有し、その中に風魔と呼ばれる者がいた。この200人の徒党は、四手にわかれて悪天候の夜でも、武田勝頼の陣場へ忍び入り、生け捕りや、相手方に紛れて関音を上げ、陣を動揺させ、味方同士で斬り合いをさせるなど、混乱させた。頭領は代々「小太郎」を名乗り、特に有名な五代目小太郎は、たけ7尺2寸(約2m18cm)、手足の筋肉荒々しくむらこぶあり、目は逆さまに裂け、黒髭で、口は両脇に広く裂け、牙4本が外に出ていた。また、頭の形は福祿寿に似て鼻が高く、声を高く出せば、約5.4km先まで聞こえ、声を低く出せば、かすれた声ではっきり聞きとることは難しかったといわれている。風魔を討とうと、一党の中に紛れた者がいたが、「立ちすぐり、居すぐり」で見破られたという。

根拠 北条五代記

箱根町大平台「姫の水」

箱根町 伝承

箱根町大平台の山腹から、こんこんときれいな冷たい水が湧いている。北条氏の

姫君達はこの水を愛で、化粧水とした。そうしたことから、村人はこの水を「姫の水」と呼ぶようになった。

根拠 かなしんブックスはこね昔かたりII「大平台夜話」安藤正平著

北条家旗馬印

小田原市 伝承

五代氏直の時代、関八州の武士の旗は家々に伝わる紋を表し、その旗は自分自身を表していた。周りに自分の旗の紋と似ているものがあれば由来を尋ね、分不相応な紋を掲げていると嘲られた。三代氏康は、赤旗十本と三鱗の大きな四角形の旗、馬印は五色旗を用いた。四代氏政は、白地に「鑊湯無冷所」という五文字を掲げた。五代氏直は、金地に「無」の一文字を掲げた。

根拠 北条五代記

御用米曲輪の 発掘調査の出土

小田原市 史実

近年、小田原城天守閣の近くで、当主のものと思われる館の跡が見つかった。わざわざ三浦半島から鎌倉石(凝灰質砂岩)を切出したり、箱根の安山岩を加工している途中の五輪塔や宝篋印塔をふんだんに使い、池の護岸や切石敷きの庭園遺構に用いるなど、全国的にも特異な庭が造られていた。しかし、江戸時代には埋め立てられ、幕府の命令により小田原藩が米を蓄え、管理する米蔵が建てられていた。御用米曲輪とは、その時の名称である。

根拠 発掘調査

レースガラスの出土

八王子市 史実



八王子城跡の御主殿跡(氏照の居館地区)の発掘調査で、ベネチアのレースガラスが出土している。戦国時代の城から出土したものとしては唯一。入手経路は不明。

根拠 発掘調査

北条一族

●伊勢新左衛門盛定 (3P)

初代早雲の父。備中伊勢氏総領伊勢盛綱の四男で、後に備中守となり高越城主となった。

●北条綱重 (3P)

北条幻庵(初代早雲の三男)の次男。武蔵小机(こづくえ)城城主。永禄12年(1569)の川中島の戦いを終えた武田軍の襲来による激戦の末、討死した。

●北条氏時 (7P)

初代早雲の子。初代玉縄城主。

●北条氏規 (11P)

天正14年(1545)、三代氏康の五男、四代氏政の弟として生まれる。

弘治2年(1556)より今川氏への人質として駿府に置かれるが、永禄8年(1565)までに帰還し、三浦郡支配を管轄、三崎城を本拠とした。

永禄12年(1569)より、武田氏との抗争の為、伊豆韮山城に在城。永禄年間以降は、北条家の外交を担い、使者としても出仕した。

豊臣秀吉の小田原攻めの際は、韮山城に籠城したが、開城を迫られた。

●北条氏照 (12P)

天文9年(1540)、三代氏康の三男として生まれ、後の武蔵滝山城主、八王子城主となる。

天正6年(1578)、御館の乱の際には、兄・氏政の名代として、氏邦と共に越後に出陣。織田信長死去後は、甥・氏直と共に上野に侵攻し、滝川一益を破り領地を拡大。豊臣秀吉の小田原攻めの際は、八王子城は重臣に守らせ、自身は小田原城に籠っていたが、八王子城は上杉景勝、前田利家に攻略され、小田原城開城後は、兄・氏政と共に切腹を命じられた。享年51。

●北条氏邦 (13P)

天文10年(1541)、三代氏康の四男として生まれ、後の鉢形城主となる。

天正10年(1582)の神流川の戦いでは、甥で当主の氏直を補佐し、滝川一益を壊走させたほか、天正壬午の乱に参戦、天正17年(1589)には宇都宮にも侵攻。豊臣秀吉の小田原攻めの際は、居城・鉢形城に籠ったが、前田利家らに攻められ降伏。その際一命は許されたが、慶長2年(1597)、加賀金沢にて病死。享年57。

●大福御前 (9P)

北条氏邦の妻。天神山城主藤田康邦の娘。小田原合戦の際は、氏邦とともに鉢形城に籠城したが、落城した際一命をとりとめ、以後仏門に入る。諸説あるが、文禄2年(1593)に自害したといわれている。



北条家臣

●富永三郎左衛門尉政直 (4P)

高谷城主。延徳3年(1491)、初代早雲の伊豆進攻に呼応して挙兵し、以後富永一族は、北条家臣として重用された。

●狩野氏 (4P)

平安時代からの豪族、狩野城主。狩野道一は、初代早雲の伊豆進攻の際、約5年間抵抗したのち降伏し、以降、狩野氏は北条家臣として活躍したが、小田原合戦の末、北条氏とともに滅亡した。

●大道寺重時 (6P)

初代早雲の従兄弟で大道寺盛昌の父。早雲と共に駿河国へ同行した家臣の1人。没年は不詳だが、小田原合戦にて討死したとされる。

●笠原政堯 (8P)

松田憲秀の長男。笠原康勝の養子となり、武田氏との戦乱中は、戸倉城の守備を任じられた。一度、北条氏を離反した後、再び北条氏に帰参。小田原合戦の際、憲秀とともに豊臣方に降参しようとしたことが露見したため、城内で殺害されてしまう。

●北条綱成 (8P)

永正12年(1515)、今川氏家臣の福島正成の子として生まれ、後の玉縄城主となる。

正成死後は、二代氏綱の保護を受け、北条姓を与えられ、その後、氏綱の子である北条為昌の後見役を任せられ、為昌死後に玉縄城主となった。

天文6年(1537)から上杉家の戦いをはじめ、各地を転戦し、天文15年(1546)の河越夜戦では、半年余り籠城戦で耐え抜き、北条軍を勝利に導いた。この功績で、河越城主も兼ねることになり、その後も、北条家中随一の猛将として活躍したが、三代氏康が病死すると、綱成は家督を子に譲り、隠居生活となる。天正15年(1587)、病死。享年73。



●北条綱房 (8P)

諸説あるが、福島正成の子。父の死後、兄妹とともに北条家に身を寄せ、弁千代と名乗っていたが、二代氏綱より偏諱を受け綱房と称した。河越夜戦では、兄綱成とともに活躍した。

●拵和氏統 (10P)

弘治3年(1557)、父伊予守から家督を継承。永禄12年(1569)、武田軍の侵攻の際、駿河興国寺城主に任命され、城を死守し、四代氏政から感状を与えられた。

●北条康成 / 氏繁

北条綱成の長男。母は二代氏綱の娘大頂院殿。初名は康成、元亀2年(1571)に氏繁に改名した。妻は氏康の娘新光院殿。永禄4年(1561)、長尾氏の来攻の際は、父綱成不在の玉縄城を守備した。その後は、四代氏政の義兄弟としての扱いを受け、父とは別個の一軍を率いた。

●松田康長 (14P)

松田憲秀の従兄弟にあたり、三代氏康から五代氏直までの三代に仕えた家臣。天正15年(1587)、豊臣氏との戦に備えて山中城の構築にあたり、小田原合戦時には、山中城主となったが、落城し討死した。

●北条氏勝 (15P)

北条氏繁(北条綱重の長男)の次男。母は三代氏康の娘の新光院殿。小田原合戦の際は山中城に在城したが、落城後は玉縄城に帰還。合戦後は徳川家康に仕え、下総岩富領1万石を与えられた。

●風魔小太郎 (15P)

北条五代約百年にわたり、北条氏を陰で支え続けた忍者「風魔一党」。頭領は代々小太郎を名乗り、最も有名なのは、四代氏政・五代氏直父子に仕えた五代目と言われている。北条五代親光推進協議会で作成した風魔小太郎では、その恐ろしい顔立ちを、般若(はんんにゃ)の面に例えている。



※(P)は初登場ページ数

北条五代親光推進協議会とは

北条五代親光推進協議会は、戦国の世にあって親兄弟争うことなく五代百年にわたり関東を治めた北条氏にゆかりのある10市2町岡山県井原市、静岡県沼津市、三島市、伊豆市、伊豆の国市、神奈川県相模原市、鎌倉市、小田原市、箱根町、東京都八王子市、埼玉県川越市、寄居町の行政及び観光協会が連携し、北条氏のさまざまな偉業や魅力を活用した観光事業を展開することにより、北条氏ゆかりの地として歴史や文化を広く全国に紹介し、地域の活性化を図ることを目的としています。

井原市地域創生課 ☎0866-62-8850
沼津市観光交流課 ☎055-934-4747
三島市商工観光課 ☎055-983-2656
伊豆市観光課 ☎0558-72-9911
伊豆の国市観光課 ☎055-948-1480
相模原市津久井まちづくりセンター ☎042-780-1403
鎌倉市観光商工課 ☎0467-61-3884
小田原市観光課 ☎0465-33-1521

箱根町観光課 ☎0460-85-7410
八王子市観光課 ☎042-620-7378
川越市観光課 ☎049-224-5940
寄居町商業観光企業誘致課 ☎048-581-2121(代)
井原市観光協会 ☎0866-62-8850
NPO法人沼津観光協会 ☎055-964-1300
(一社)三島市観光協会 ☎055-971-5000
(一社)伊豆市観光協会 ☎0558-73-1958

(一社)伊豆の国市観光協会 ☎055-948-0304
(一社)相模原市観光協会 ☎042-771-3767
(公社)鎌倉市観光協会 ☎0467-23-3050
(一社)小田原市観光協会 ☎0465-22-5002
(一財)箱根町観光協会 ☎0460-85-5443
(公社)八王子観光協会 ☎042-643-3115
(公社)小江戸川越観光協会 ☎049-227-8233
寄居町観光協会 ☎048-581-3012